

これはあくまでも個人的な考えに基づいたものですが、私は十年程前に、庭づくりの心構えを切り替えました。

その理由は、庭づくりはいくら情熱を傾け取り組んだとしても、これで良しという完遂の域に達すること、は、むずかしい世界ではないかと感じたからです。

別な言い方をすれば、庭づくりとは際限無しに広がる果てしない宇宙のような無限の世界。修業の途中や、独立して庭をつくることに日々夢中になっていた頃は、そのようには思っておりませんでした。あの当時は、一日も早く完成された職人になることを目指し、己の不甲斐なさを克服するため奮呼の日々を送っていました。



この気持ちに変化した要因はふたつ考えられます。ひとつは、日本や世界各地に残された古代人や先人の技を目のあたりにし、強い衝撃を受けたこと。古代の人々の足跡をたどる度に、自分には何が足りないのだろう、自分は今何を成すべきか等自己への問いかけが続きます。あとひとつの要因は、平成四年から講師を引き受けた教育研修委員会が担当する学科講習だと思っています。講義をするためには事前にそれなりの準備が必要です。改めて自分も勉強しなければなりません。修業時代より現在にいたるまで、技の修得と共に座学にも情熱を傾けてきたつもりです。

第一回目の講習を終えて

大胡氏自宅前にて記念写真におさまる

しかし講義する立場は、独学の形態の延長では対応しきれないことを痛感しました。適当にこの辺で収めてしまうということが、できないことだと感じました。

しかし仕事や所用をこなしながら、勉強を続けるということは大変シンドイことです。しかも行き着く先が見えません。真摯に取り組むことによって、いつか解決出来ると思っていたそれらの問題は、中々難問で解決の糸口が見つかりません。しかし、十年程前から、講習や先人の技の修得にどのように対応したら良いのか、おぼろげながら見えてきたような気がしました。

それは意志を持ち続けること。それが難問解決の答えにつながるのではないかと思います。現在私の庭に対する姿勢は、極める等という意識を持つことよりも、自分が学びたいことや、表現したいことに淡々と取り組み続けることだと思っています。こだわり続けること、言い方を変えるならば執着心こそが庭仕事に携わる者に求められているような気がします。ですから現在若い人達に、早く一人前になればと

激励する前に、何しろ続けてみる、そうすれば何かが見えてくる、と話すようにしています。

その様な気持ちで協会の実情を見た場合、学問や技を修得する恒常的な場が、整えられているとはいいがたいのが現状です。例えば机上で造園学を学ぶ場としては、102時間講習というものがあります。六人の講師がテキストをベースにして、造園学全般にわたり講義を行っています。しかしそれを受講する人達の多くは、技能検定試験の学科試験免除を目的としており、その受講課程で造園知識を学ぶことが出来たということです。あくまでも一過性の勉学の場です。実技的には、庭園部会長の大胡氏が、川合玉堂邸で垣根や土橋の講習を、マイスター活動として、協会と共催で年一回行っています。



この講習は熱心な若者が大勢集まるからという大胡氏の、好意と熱意で成り立っています。私も教育研修委員会を代表して、この講習会に参加させていただいておりますが、年一回とはいえ大胡氏が講習をつづけていくことは、同じ職人の立場からみて、かなりご苦労なことと思っています。

燭台や湯桶も用意された実用的な四方仏の蹲踞と組み込みの織部灯籠

また、戸塚支部が数回にわたって行っている石の勉強会は、支部単位のもので広域に行われているものではありません。102時間講習の石造添景物の講義の度に、石灯籠を今まで据えたことがある人は手を上げて受講生に問いかけます。多くて四～五人、一人の年もありました。まるで灯籠など興味がない、という顔をした受講生を前に最初は戸惑いました。

しかしそのような受講生の中にも、新しく彫った灯籠を風化させ時代物に見せる方法や、古代灯籠を集めることに秀でた実在した目利き話、鎌倉時代の灯籠と江戸時代の灯籠との比較、また鉄や鋼を使わず大岩を割る方法などを講義すると、眠たそうなドロンとした顔つきに変化が見えます。普段草刈仕事の多い若者も、技や学問を継続して学べる場があれば、参加して将来ひとかどの職人に育ってくれるのではないかと期待しています。



現在協会の会員数が減少しています。脱会の内容は廃業する、メリットがない、会に魅力を感じないの三点に集約されているような気がします。廃業はともかく、メリットも魅力も、誰かがやってくれるだろうという受動的期待感を会員が持っている限り、得ることは難しいと私は思っています。

岡崎の石工が自信を持って彫りあげた 気品漂う四方仏海は仕上げの途中

会員一人ひとりが、知恵と労力を出し合い積極的な行動を起こさない限り、毎年言われている協会員を増やすということも、単なるお題目で終わるのではないのでしょうか。

そして、ゆくゆくは技を伝える人材も絶え、若い人も寄り付かない、しかもニーズのない業となってしまうのではないかと危惧しています。

十年前より考えていた構想を実現させようと決意したのは一昨年秋でした。

まず鈴木会長に相談しました。有志達の自発的集まりの恒常的な勉強会を立ち上げたい。協会にはご面倒を掛けぬつもりですが会長のご賛同があれば心強いです とかいう話をしたような気がします。会長は即快諾してくれました。かねてより参加をお願いするつもりでいた方々に会い、主旨を説明し全員から参加の返事をいただきました。勉強会の名称は「庭守」とし、連絡、会計、記録等の役割を決め活動を開始したのは、平成十九年十月二十日でした。会員数は十四名。「庭守」の主旨が会の活動に生かされるか否かを見極めるために、はじめの一年間は十四名のメンバーで活動することになりました。参加者で確認した「庭守」の主旨とは

- 一、現在危惧されている技能の低下を改善することを目的とする。
- 二、日常経験する機会の少ない技や知恵をも修得する。
- 三、造園に関するものを幅広く、かつユニークな内容をも含めて学ぶ。
- 四、一人の熟練した経験者に頼る形式は取らず、全員が講師の自覚を持つ。
- 五、経験のまだ浅い人は、将来業界の指導的立場に立つことを意識して参加する。
- 六、特定の価値観や持論や技能を一方向的に押しつけず、多種、多様な価値観や技能を認める寛容や度量を持つ。
- 七、会費は年一万円とする。
- 八、勉強会は隔月の最終の日曜日とする。

以上を確認し勉強会が始まりました。一年間の勉強会の内容は、大胡氏のご好意により道具置場において、地車、箱ジャッキ、コロ、滑車等現在では使う機会の 少なくなった道具類の説明と扱い方。また、四代にわたって使われてきた諸道具のきちんと整理、保管された状態を拝見し、道具に対する職人の姿勢を学ぶことが出来、最初の勉強会に相応しいとても有意義な勉強会でした。



椀形の中鉢を背景にホツとした表情の面々 四方仏の中鉢を組み終えて写真におさまる一期組

都筑JAの敷地を借り、1200キロの三波の青石を使い、三又や修羅に乗せてのコロ引き、“古田織部の世界”と銘打った、木曽石を用いた霰崩しの延段、屋内においては、果実酒のつくり方、高所の枝落して活躍する“カギ竹”の製作、土壌のPH、EC測定方法と土壌についての講話、茶室内の竹花入れ“尺八”の作り方と竹花入れについての講話などを学びました。

緑支部福田園の畑をお借りしての蹲踞の組み方は、実際に使う露地向きと、景色に重きを置いた中鉢を三回にわたって組みました。四方仏の方位や、キリンタン灯笼の異名を持つ織部灯笼にまつわる利休七哲と称される弟子達とキリンタンの話等も含めました。その他使用する道具の扱い方、ロープワーク、石を扱う際の身のこなし方等多岐にわたる充実した一年でした。

一年がたち、共に勉強に励む方を新たに募ることになりましたが、それには条件があります。

- 第一に、先に記した「庭守」の主旨に賛同出来る方。
- 第二に、雇用主や親が代わりに申し込むのではなく本人の希望で申し込むこと。
- 第三に、職人としての資質を身につけている方。
- 第四に、生涯この仕事を続ける強い思いを持っている方。
- 第五に、欠席の少ない方。



絞彫り飛石を額見石に見立て時代物葛石(かずらいし)を縁石に用いた延段



木曽石、真黒石、新鞍馬の異なる石材を小づめに用いた延段の講習風景



二石鏡の前に据えられた椀形の手水鉢は信長の叡山攻めの際焼け残ったものと伝えられている

巷には、軽トラックに真新しいキャタツを乗せ、第二の人生は植木屋として活躍したいと元気なシルバーが走り回っています。以前には、見られなかった大型 ホームセンターの園芸売場で、気に入った植木や草花を購入した人々が、マイカーに積込んで自宅の庭をアレンジしています。

世の中は時代と共に少しずつ変化するものです。プロとしての我々が、時代の変化を唯ボヤクだけであったり、また旧態依然の状態に甘んじていれば、いずれ世の流れから取り残されるでしょう。

緑化や庭に対する考え方や捉え方が今までとは違う形で変化しつつあるならば、その変化する道筋に立ち、より素晴らしい方向と内容を自信を持って指し示し表すことが、私達の使命であり仕事だと思っています。

その為の切磋琢磨と情熱に支えられたこだわりが、我々に今問われている最大の課題だと私は信じています。

この勉強会発足をきっかけに、魅力ある様々な形の営みや事業利益につながる活動が、各分野で活発におこなわれることを期待しています。